

## 母親の育児満足感に影響する父親要因などの分析

大藪 泰, 前田 忠彦

【要約】4ヶ月児と10ヶ月児をもつ母親にアンケート調査を実施し、育児満足感と父親との関係などに対する認知的要因との関係を検討した。その結果、10ヶ月児の母親では、育児満足感、社会的ネットワークの良さ、父親の協力度、夫婦関係の良さが低下し、仕事の阻害感が増加した。重回帰分析から、4ヶ月児の母親の育児満足感に統計的に有意な影響を及ぼす要因を、影響力の強いものから列举すると、乳児の気質、仕事の阻害感、自己評価、夫婦関係、育てられ経験となり、10ヶ月児の母親では、仕事の阻害感、自己評価、夫婦関係、乳児の気質、社会的ネットワークとなった。

見出し語：育児満足感、仕事の阻害感、自己評価、乳児の気質、育てられ経験、社会的ネットワーク、父親の協力度、夫婦関係

### 1. 研究の目的

母親の育児満足感、乳児の発達に影響する要因であることが知られている(ラム, M.E., 1993)。この母親の育児満足感の良否は、母親自身の認知的要因が多角的に影響していると考えられ、すでに筆者らはこのことを示唆する知見を得てきている(大藪・前田, 1993; 前田・大藪, 1993)。本研究は、こうした母親の認知的要因をさらに詳細に検討し、月齢の異なる乳児をもつ母親の育児満足感と父親との関係について

の認知的要因などとの関連性を明らかにしようとするものである。

### 2. 調査の対象と方法

研究の対象は、長野県上田市に在住し、1993年6,7,8月に「4ヶ月児健診」と「10ヶ月児健診」を受診した母親であった。4ヶ月児と10ヶ月児の母親を対象としたのは、乳児との相互作用の過程で母親意識が漸次確立されること(仁平ほか, 1986)、またこの両時点間で生じる乳児の大

きな発達的変化に対応して、母親の育児意識にも違いが生じる可能性を示唆するデータが得られているからである（大藪・前田,1993など）。

調査は、調査票を個別に母親に郵送し、回答を記入したものを健診場に持参するよう依頼して実施した。有効回答数は、4ヶ月児群 202通、10ヶ月児群 182通であった（回収率はそれぞれ67.3%と60.7%）。

調査票は、Belsky, J. (1984)などを参考に、育児満足感およびそれに影響すると想定された8要因からなる計9領域 47項目から構成されている。4ヶ月児群と10ヶ月児群の調査票は、同一の内容である。

- I. 育児満足感 : 「母親であることの満足感」「育児の楽しさ」などを尋ねる6項目
- II. 仕事の阻害感 : 「子育てによる仕事の能力の阻害」などを尋ねる5項目
- III. 落ち着き : 母親自身の「冷静さ」「落ち着き」などを尋ねる5項目
- IV. 自己評価 : 母親自身の「自己満足感」「有能感」などを尋ねる5項目
- V. 乳児の気質 : 「泣き」「機嫌のよさ」などを尋ねる5項目
- VI. 育てられ経験 : 「母親が自分の親から愛情深く育てられたか」などを尋ねる5項目
- VII. ネットワーク : 夫以外の「援助者」や「相談相手」の有無などを尋ねる5項目
- VIII. 父親の協力度 : 「家事」「育児」に対する父親の協力の程度を尋ねる5項目
- IX. 夫婦関係 : 「夫が精神的な支えであるか」など夫への信頼感を尋ねる6項目  
各項目とも5段階評価（1:「まったくそう

は思わない」～5:「非常にそう思う」）で回答を求めた。

有効回答した母親の平均年齢は、4ヶ月児群で28.8歳、10ヶ月児群で29.7歳であった。父親の平均年齢は、それぞれ31.7歳、32.6歳であった。

### 3. 結果

すでに指摘したように、筆者らの先行研究（大藪・前田,1993; 前田・大藪,1993）から、母親の養育意識は、4ヶ月児群と10ヶ月児群の間で異なる結果が得られたので、分析は月齢群ごとに行われた。乳児の性別は、本データに影響することがなかった。

#### (1) 質問項目の因子分析と信頼性の検討

47個の項目の回答分布を個別に検討し、極端に偏りが無いことを確認したうえで、384名全員のデータを用いて因子分析（斜交プロマックス解）を行った。9因子解で単純構造に近い因子構造が得られ、想定領域と質問項目との間にほぼ良好な対応関係がみられた。そこで、各想定領域について項目得点を加算（ただし逆転項目の得点は[6-項目得点]とした）して、「領域得点」を算出した。表1.に示したように、 $\alpha$ 信頼性係数は.69～.84の範囲にあって高い等質性が認められた。

#### (2) 4ヶ月児群と10ヶ月児群の領域得点の比較

4ヶ月児群と10ヶ月児群の各領域得点を比較するため、両群間で平均値の差の検定を行った

(表1.)。その結果、有意差がみられたのは、領域Ⅰ：育児満足感( $t=2.80, df=382, p<.01$ )、領域Ⅶ：社会的ネットワーク( $t=3.32, df=354.1, p<.001$ ; Welchの方法による)、領域Ⅷ：父親の協力度( $t=2.47, df=382, p<.05$ )、領域Ⅸ：夫婦関係( $t=3.33, df=351.7, p<.001$ ; Welchの方法による)であり、いずれも10ヶ月児群の得点が低かった。領域Ⅱ：仕事の阻害感では、10ヶ月児群の得点が高い傾向がみられた ( $t=1.76, df=382, .05<p<.10$ )。

次に、これらの領域で、月齢間で有意差のみられた質問項目にもとづいて、10ヶ月児群の母親の特徴を記述する。

領域Ⅰでは、10ヶ月児の母親のほうが、「母親になって気持ちが落ち着かず」、「母親として振る舞っている自分を自分らしく思えず」、「母親であることの満足感が低下」していた。

領域Ⅱでは、「できるだけ早く外で仕事したいと思って」いた。

領域Ⅶでは、「育児への援助者」「家事への援助者」「子育てについての情報の適切な提供者」「何でも打ち明けて相談できる人」が少ないとみなしていた。

領域Ⅷでは、「父親は子どもが泣いても知らん顔していることが多く」、「家事に協力的ではない」と感じていた。

領域Ⅸでは、「父親は自分の話を聞いてくれない」、「自分のことを理解してくれない」、「精神的な支えにならない」とみなしていた。また、「父親の仕事に対する評価」も「父親に対する満足感」も低下していた。

### (3) 育児満足感を規定する領域の分析

領域Ⅰを基準変数、領域Ⅱ～Ⅸを説明変数とする重回帰分析を月齢ごとに行った。結果を表2.に示す。重相関係数は、4ヶ月児群で.682、10ヶ月児群で.718であり、両群とも育児満足感の変動は、8つの説明変数により約50%説明された。

10ヶ月児群の領域Ⅷ：父親の協力度では、単相関係数と標準偏回帰係数とで正負の符号が逆転していた。これは領域Ⅸ：夫婦関係との相関が高い( $r=.676, p<.001$ )ことによる抑制が働いたものと解釈される。これ以外の領域では、単相関係数と標準偏回帰係数の正負の符号は一致していた。

したがって、領域Ⅱでは、得点が増加するにつれて、つまり仕事の能力が阻害されているという感情が強いほど、育児満足感が低下する。しかし、それ以外の領域では、得点が増加するほど育児満足感が高まることになる。8領域のうち、標準偏回帰係数が統計的に有意であるものを影響力の強いものから列挙すると、4ヶ月児群では、領域Ⅴ：乳児の気質、領域Ⅱ：仕事の阻害感、領域Ⅳ：自己評価、領域Ⅸ：夫婦関係、領域Ⅵ：育てられ経験となった。同様に、10ヶ月児群では、領域Ⅱ：仕事の阻害感、領域Ⅳ：自己評価、領域Ⅸ：夫婦関係、領域Ⅴ：乳児の気質、領域Ⅶ：社会的ネットワークとなった。

すなわち、両月齢群間で、統計的に有意な領域を比較すると、4ヶ月児群の領域Ⅵ：育てられ経験に代わって、10ヶ月児群では領域Ⅶ：社会的ネットワークが出現した。また、4ヶ月児

群では最も影響力が強かった領域Ⅴ：乳児の気質は、10ヶ月児群では影響力が弱まり、領域Ⅱ：仕事の阻害感、領域Ⅳ：自己評価、領域Ⅸ：夫婦関係の影響力が強まった。

#### 4. 考察

母親の養育意識とそれに関わる認知的要因は、4ヶ月児の母親と10ヶ月児の母親とで異なる特徴を有することが本研究で再び確認された。

両群の母親を比較すると、10ヶ月児の母親は4ヶ月児の母親より育児満足感（領域Ⅰ）を低く評価すると同時に、領域Ⅶ・Ⅷ・Ⅸの得点の低下に示されたように、父親や父親以外の人による母親のサポート体制も低く評価している。また、仕事の阻害感でも、10ヶ月児の母親のほうが強い阻害感を感じる傾向がみられている。したがって、母親の意識内容と、その内容を形成する一要因である生活環境には、両群の母親で何らかの違いが生じている可能性が推測されよう。

生後4ヶ月から10ヶ月という半年の間に、乳児は探索活動を活発化させ、人見知りを始め、離乳食を食べ始めるなど、大きな発達的变化をみせる。それは、マラー、M.S.(1982)が「分化期」と命名した、母子一体の共生状態から乳児が孵化(hatching)する時期に相当している。本研究結果によって示された10ヶ月児の母親の育児満足感の低下と、仕事の阻害感の増大は、ちょうどこの乳児の分化期に平行して、母親の側でも乳児や生活環境に対する関係性を変化させようとする兆しの現れであるように思われる。

この時期から母親の関心は、乳児を中心とした家庭内の事象から、社会での仕事といった家庭外の事象へと拡大し始めることが考えられる。そして、母親を取り巻く父親やその他の人々も、4ヶ月児という幼弱な乳児とその母親に対しては保護的な関心を強く抱くが、次第にそうした関心を薄め、母親をサポートする体制を緩めていくことが推測される。

それでは、両月齢群の母親の育児満足感に、その他の認知的要因（領域）がどのように影響しているのだろうか。重回帰分析の結果、ここでも両群間に興味深い違いが認められている。

4ヶ月児群では、仕事の阻害感の影響力以上に、乳児の気質要因が最も影響力が強く、ここでも母親と乳児との関係性の強さが示唆される。一方、10ヶ月児群では気質要因の影響力は依然として強いが、4ヶ月児群より弱まっており、対照的に仕事の阻害感や夫婦関係や社会的ネットワークの影響力が強まっている。

したがって、この重回帰分析の結果でも、10ヶ月児の母親は4ヶ月児の母親より、仕事の阻害感という家庭外の事象に関わる認知的要因が、その育児満足感により強く影響するようになることが示唆される。また、10ヶ月児の母親は、夫婦関係や社会的ネットワークといったサポート体制を低く評価しやすいことを指摘したが、同時にそうしたサポートを低く認知すればするほど、育児満足感を低下させる傾向が強いのも10ヶ月児の母親のほうなのである。

先述したように、10ヶ月児の母親を取り巻く人々に、社会的サポートを手控える傾向が推測されたが、育児満足感の低下に悩む10ヶ月児の

母親には、むしろ父親などのサポートがより必要とされるのかもしれない。また父親とどのような関係が有効であるかに着目すると、とりわけ父親の協力度で抑制が働いた10ヶ月児群の母親では、父親の家事や育児に対する協力度ではなく、むしろ夫婦間の信頼度が重要になってくることが推測されるのである。

育児満足感という要因を通して考察すると、4ヶ月児の母親も10ヶ月児の母親も、父親や他の人々からのサポートを必要にしている。しかし、必要とされるサポートの内容は、両月齢の母親の間で異なっている可能性が示唆される。

本研究で取り上げた領域の中には、直接的に育児満足感に影響するのではなく、領域間で影響しあいながら、間接的に育児満足感に影響することが想定可能なものもある。たとえば、父親の協力度は夫婦関係と強い相関をもち、育児満足感への直接効果は有意ではない。今後、本研究データを見直し、領域間の連鎖についてさらに検証することが可能である。また、4ヶ月児と10ヶ月児の母親の意識構造の変化をさらに検討するためには、縦断データや事例の分析も有効であろう。

## 引用文献

- Belsky, J. 1984 The determinants of parenting : A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- ラム, M.E. (編著) 久米 稔 (監訳) 1993 非伝統的家庭の子育て—伝統的家庭との比較研究— 家政教育社  
(Lamb, M.E. (ed.) 1982 *Nontraditional families: Parenting and child development*: LEA.)
- 前田 忠彦・大藪 泰 1993 乳児をもつ母親の養育態度に関する研究 (II) 第40回 日本小児保健学会講演集, 104-105.
- マーラー, M.S. 他 高橋 雅士他 (訳) 1981 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化— 黎明書房  
(Mahler, M.S., et al. 1975 *The psychological birth of the human infant*. Basic.)
- 仁平 義明・村井 憲男・村井 則子 1986 母性確立への乳児の個性の影響 *母性衛生*, 27, 700-705.
- 大藪 泰・前田 忠彦 1993 乳児をもつ母親の養育態度に関する研究 (I) 第40回 日本小児保健学会講演集, 102-103.

表1. 9領域得点の $\alpha$ 信頼性係数と月齢群の平均値の差の検定

領域	質問内容	$\alpha$ 係数 <sup>1)</sup>	4ヶ月児群 <sup>2)</sup>		10ヶ月児群 <sup>3)</sup>		平均値の比較	
			平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	等分散の検定	t検定	
領域I	育児満足感	.760	23.3 (2.88)	22.5 (3.13)				**
領域II	仕事の阻害感	.722	11.4 (3.32)	12.0 (3.28)				
領域III	落ち着き	.693	15.1 (2.77)	14.6 (2.92)				
領域IV	自己評価	.693	15.8 (2.85)	15.4 (2.88)				
領域V	乳児の気質	.736	20.5 (2.78)	19.9 (2.81)				
領域VI	育てられ経験	.780	17.8 (3.95)	17.5 (3.77)				
領域VII	ネットワーク	.742	19.9 (3.14)	18.7 (3.76)	**			***
領域VIII	父親の協力度	.844	19.8 (3.81)	18.8 (4.02)				*
領域IX	夫婦関係	.830	23.7 (3.56)	22.3 (4.31)	**			***

Note. <sup>1)</sup>  $\alpha$ 係数は全体のデータに基づいて算出されたもの(N=384)

<sup>2)</sup> 4ヶ月児群:N=202

<sup>3)</sup> 10ヶ月児群:N=182

\* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

表2. 育児満足感を基準変数とする重回帰分析(月齢別)の結果

領域	質問内容	4ヶ月児群		10ヶ月児群	
		標準偏回帰係数( $\beta$ )	相関係数( $r$ )	標準偏回帰係数( $\beta$ )	相関係数( $r$ )
領域II	仕事の阻害感	-.244***	-.423***	-.361***	-.483***
領域III	落ち着き	.037	.279***	.115	.315***
領域IV	自己評価	.164*	.432***	.254***	.459***
領域V	乳児の気質	.297***	.464***	.211***	.416***
領域VI	育てられ経験	.134*	.249***	.046	.276***
領域VII	ネットワーク	.036	.250***	.122*	.299***
領域VIII	父親の協力度	.110	.333***	-.125	.276***
領域IX	夫婦関係	.160*	.401***	.228**	.377***
重相関係数(R)		.682***		.718***	

\* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



[要約] 4ヶ月児と10ヶ月児をもつ母親にアンケート調査を実施し、育児満足感と父親との関係などに対する認知的要因との関係を検討した。その結果、10ヶ月児の母親では、育児満足感、社会的ネットワークの良さ、父親の協力度、夫婦関係の良さが低下し、仕事の阻害感が増加した。重回帰分析から、4ヶ月児の母親の育児満足感に統計的に有意な影響を及ぼす要因を、影響力の強いものから列挙すると、乳児の気質、仕事の阻害感、自己評価、夫婦関係、育てられ経験となり、10ヶ月児の母親では、仕事の阻害感、自己評価、夫婦関係、乳児の気質、社会的ネットワークとなった。